

エンターテイナー

雨和七瀬

花束を持って晴れ舞台を祝おう

黄色いバラの棘が刺さる

歪んだ顔に、へばりついていた仮面が落ちる

ああ、あのときのミスが無ければ

僕も舞台に立っていたのだ

流行り病で連絡を途絶えさせなければ

離れる運命の台本を読み込んでいれば

全てが己の咎ではなくとも

不甲斐なさ、無力さに花束が石畳に落ちる

胸の前、ハンカチで指を包む

本当は感涙を拭うために持ってきたものを

滲む澱みを隠すようにあてがう

この澱みは主役も観客も知らなくていい

ただ、僕の隣

落ちた花束を拾う『共演者』だけが

零落れた脇役の葛藤などという

サイドストーリーなんて

なんてくだらないものを

舞台袖に隠していてくれれば

ドジを踏んだ茶番劇で幕を下ろせるのだから

そうだろ？ 何も知らない観客どもよ

終幕